

翻訳家銭稲孫と日本人との交遊

— 谷崎潤一郎、岩波茂雄を中心に

はじめに

銭稲孫（一八八七—一九六六）は二十世紀の中国においての傑出した日本文学翻訳家である。前世紀初頭からなくなるまで数十年にわたって翻訳活動を続け、文学をはじめ、歴史、考古、美術、医学といった多分野の訳作を後世に残したが、殊に文学翻訳に大きく寄与した。中国においてはじめてダンテ『神曲』の漢訳を行ったのみならず、『万葉集』漢訳の先駆けの一人として『漢訳万葉集選』（日本学術振興会、一九五九年）をもって最初の漢訳本を創り上げ、『源氏物語』の翻訳にも積極的に取り組んだ。ほかに、『木偶浄瑠璃』（作家出版社、一九六五年）、『近松門左衛門・井原西鶴選集』（人民文学出版社、一九八七年）といったような名訳がある。それほど多くの傑作を生み出すこと

には、銭稲孫自身の才能はもちろん、日本人との交遊も大いに関係している。本稿は、銭稲孫と、佐佐木信綱や、谷崎潤一郎、岩波茂雄など日本人との交遊を解明し、それが翻訳家として活躍できた銭稲孫にとつての意味を検討することを目的とする。

一、日本詩歌訳の開始と展開—佐佐木信綱、山室三良と

銭稲孫は、一九五九年に日本学術振興会から出版された『漢訳万葉集選』と、一九九二年に中国友誼出版公司から出された『万葉集精選』（日本文学名著選訳叢書）に代表される万葉歌の翻訳をもって、翻訳界での地位を築いた。『漢訳万葉集選』の成書過程とその内容については拙論「銭稲孫訳一九五九年版『漢訳万葉集選』の成立経緯—佐佐木信綱宛銭稲孫未発表書簡十二

鄒 双双

通、鈴木寅雄書簡一通²と「佐佐木信綱選、錢稻孫訳『漢訳万葉集選』研究―成立背景、出版事情、翻訳をめぐる³」に詳細に述べたため、繰り返しを省く。「万葉集精選」は錢稻孫が既訳の「漢訳万葉集選」をベースに更に三百余首を加え、合計六九十首とし、文潔若の整理によって出来上がったのである。前者の韻訳に対し、「万葉集精選」には錢稻孫の試みた数種の訳が全部入っている。一首の歌に「離騷」体から民謡までいくつかの翻訳形式が編入され、錢稻孫の優れた才能が披露された。これとはともかく、ここであらためて指摘しておきたいのは、「漢訳万葉集選」の成立が錢稻孫と佐佐木信綱との交遊を切り離しては語れない、ということである。逆に言えば、「漢訳万葉集選」は二人の交遊の証でもある。

上記の二作は、錢稻孫の代表作として最も知られている。しかし、その前に、もっぱら万葉歌だけの訳集ではないとはいえず、二作にとって前触れのような訳詩集があった。これは一九四一年四月到北京近代科学図書館から発行された錢稻孫訳の「日本詩歌選」である。まずその構成から見る。「万葉集」、「和歌」、「俳句」、「歌謡」、「現代詩」という目次の章立てから分かるように、古代歌謡から現代詩まで扱っている。内訳として「万葉集」四四首、「和歌」六一首、「俳句」二九句、「歌謡」一二首、「現

代詩」三首の歌となっており、あわせて一四九首である。原文も訳文も対称に配列されている。本文の後、「作者小考」が付けられてあり、六四人にも及ぶ。六四人の詩歌を取り上げて翻訳を行ったことが分かる。内容から見れば、万葉歌をふくむ和歌は圧倒的に多く過半数を占め、現代詩はわずか鳥崎藤村の「千曲川旅情の歌」と「雲のゆくえ」、および宮崎賢治の「雨ニモマケズ」という三首である。現代詩より和歌のほうに力が注がれていることが明らかである。管見に入った限りでは、日本詩歌の漢訳に手を染め訳詩集を出したのは錢稻孫が最初である。

かつて、中国思想家にして革命家の梁啓超は「本来、翻訳は至難の業である。詩歌の翻訳は、難中の難である」と述べた。では、なぜ錢稻孫はあえて日本詩歌、特に日本古代詩歌の漢訳に挑戦しようとする気を起こしたのか。それは一九三六年末に日本が設立した北京近代科学図書館とその館長山室三良に関係してくる。拙稿「錢稻孫と北京近代科学図書館」に図書館の設立過程、図書館で錢稻孫が「助言者」、「日本語教師」、「翻訳者」という役目を果たしたことが論じられているが、本論では、館長山室三良の錢稻孫の翻訳活動への影響力を強調したい。

山室三良は一九〇五年（明治三八年）に長野県佐久市に生まれ、一九三三年（昭和八年）に九州帝国大学法学部を卒業する。

その後北京に留学し、国立清華大学大学院に入る。一九三六年に外務省の委嘱により北京近代科学図書館を創立し、館長に就任する。一九四六年に日本に引き揚げ、九州大学に助教、教授を勤める。

『日本詩歌選』に収録された山室の「跋」には、

昭和十二年の六月頃から錢先生に訳していた『万葉の歌などがつもりもつて相当の数になったので此処に集めて一卷とした。始めの裡はこちらから歌を選んで無理にお願したのを此の頃では先生があれこれとお好きなのをさがし出して下さる様になった。

とある。つまり、本集に集まった訳詩は、山室三良の依頼あつてのできである。訳し始めたのは一九三七年である。訳詩は北京近代科学図書館の機関誌「館刊」と「晋滲」に発表されている。当時、北京にいた中国文学研究家の奥野信太郎は訳詩を見て次のように述べている。

張我軍、謝六逸、錢歌川といったような具合に日本語を語り日本文学を翻訳する支那人の数少しとしない。しかし

その智識の正確と教養の深さから云ったならば、周錢二先生の上に出るものは一人も無いと断言できる。先頭わが近代科学図書館の彙報に錢先生の万葉歌三首に対する解釈が載せられてあつたが、あれもただ片鱗に止めず、更に万葉歌全体の、全体でなければ秀歌だけでもあの調子で解釈して行っていただけたら、支那に於ける最初の支那語による万葉の解釈ができることと思はれる。翻訳はもとより至難のことである。その至難といふことはよき翻訳を望むが故にである。雑なものならば有り余る位であるといつてもよからう。

解釈に至つては自国の古典に於ても頗る難事とされてゐる。況んや異邦の古典に於ては尚更のことである。錢先生は初めてこの試みに手を染められたのであるが、それが積り積つて遂に巻冊を成す日の来ることを待ちこがれずにはゐられない。

文中の「周錢」はつまり周作人と錢稻孫のことである。「知識の正確と教養の深さから」「周錢二先生の上に出るものは一人も無い」という彼の評価は、中国の事情に詳しい上に、錢稻孫の日本語能力、古典教養を見聞きた彼だからこそ、断言でき

たのであろう。奥野信太郎が「積り積つて遂に巻冊の成す日の来ることを待ち焦がれずにはいられない」と記しているが、この望みは「日本詩歌選」によって叶うことになった。

管見によれば、北京近代科学図書館機関誌での発表以前に、錢稻孫はダンテの「神曲」を訳したが、日本詩歌の翻訳を試みたことはなかった。言い換えれば、館長山室三良が錢稻孫に日本詩歌翻訳の契機を作り、その道を切り開いてあげたのである。図書館機関誌での発表や、訳詩集「日本詩歌選」の刊行などを通じて、錢稻孫は日本に名を馳せるようになった。それで、佐佐木信綱のような万葉研究家に注目され、その「万葉集」漢訳の注文を引き受け、最終的に「漢訳万葉集選」を出すに至ったのである。その意味では錢稻孫が日本古典文学翻訳の道を歩むようになったことに、山室三良と佐佐木信綱は大きな働きをかけたといえる。

二、「源氏物語」を通じての交遊―谷崎潤一郎と

前節で触れた佐佐木信綱と山室三良以外に、錢稻孫と交遊を持っていた日本人作家には、小説家谷崎潤一郎が挙げられる。

谷崎潤一郎（一八八六―一九六五）について、ここで紙幅を

浪費してあらためて紹介することはないであろう。彼は一九一八（大正七）年と一九二六（大正一五）年の二度にわたつて中国を訪れたことがある。初回は北方から江南まで二か月をかけた広領域の旅行であり、二度目の時は、中国の新しい文士作家に会うことを目的とし、上海のみに滞在していた。内山完造の斡旋で劇作家田漢、郭沫若、歐陽予倩などの文学者と知り合い交流を重ねたが、錢稻孫と会わなかった。その時、錢稻孫はまだ国民政府の教育部で勤めており、翻訳家としての活動はまだ展開されなかったからである。しかし、第一回大東亜文学者大会の時の二人の対面が確認されている。下記はその時に交わした会話の一節である。

「どうも神経痛で右手が痛んでね」と谷崎氏は顔を顰める。「それはお困りですね。支那にはお酒で神経痛を治す法があります」「それは素晴らしい」と谷崎は乗り出した。「虎骨酒というのです虎の骨の酒で……」「凄そうだな、だが効きますかな」「さあ、それはね……」ここで両巨頭は声を合合わせて笑ってしまった。¹¹

一九四二年十一月十日に行われた会話である。錢稻孫は中国

華北代表者として、十一月三日から十日まで開催された第一回大東亜文学者大会に参加し、東京での発会式や、円卓文学者会議、そして東京見学の後、諸代表とともに主催者日本文学報国会の招待を受け、関西めぐりをした。

同日（九日）一向は宇治山田に到着、伊勢大神宮の外宮に詣で、翌早朝内宮に参拝して大阪に向かった。大阪にては大阪府知事招待の午餐会があり、午後一時より中ノ島中央公会堂で文学報国会、朝日新聞社共同主催の大東亜講演会を開催、朝日新聞社長村山長拳氏の開会の辞に、呉瑛、周化人、張我軍、恭佈札布、谷崎潤一郎の五氏が講演を行った。講演終了後直ちに奈良に向かう。

錢稻孫は代表者の一人として皆と共に中之島中央公会堂で開催された大東亜講演会に出席した。そこで谷崎潤一郎の講演を聞いた。また「婦人画報」の報道では「控室では関西在住の文士と交歓が行われた」という。おそらく錢稻孫と谷崎潤一郎は控室で上記のような会話をして花を咲かせたのであろう。話しぶりから見れば、二人は気さくに交歓できたようである。

日本文学を研究、翻訳している錢稻孫にとって谷崎潤一郎は

決して遠い存在ではない。二人の対面は大東亜文学者大会の時にしか確認されていないが、二人の関わりはそれっきりで終わったわけではなく、「源氏物語」を通じ、錢稻孫と谷崎潤一郎の交遊が深まったのである。周知の如く、谷崎潤一郎は三度にわたり「源氏物語」の現代語訳を行い、それに對し頗る執着と愛着を示した。錢稻孫も「源氏物語」漢訳を試みた。これは彼の一生の願いだ、と文潔若が「我所知道的錢稻孫」に述べている。中国研究家奥野信太郎は一九四〇年に出版された隨筆集「隨筆北京」に錢稻孫を「食通の一人」としたほかに、「紅樓夢の文体に倣って着手されてゐる源氏物語の支那訳は、素より至難中の難事業ではあらうが、その完成は遠い将来のことであるとしても、現代支那に於て先生以外にこの難事業に当り得る人はまづ無いと断言して憚らない」と記している。つまり、錢稻孫は「紅樓夢」の文体に倣って「源氏物語」の漢訳に取り掛かったのは少なくとも一九四〇年まで遡ることができる。

しかし、實際中国に不安定な情勢が続くことに相まって錢稻孫は「万葉集」やほかの翻訳事業に追われたため、「源氏物語」漢訳はあまり捗らなかつた。なおかつ、戦後、彼は「漢奸」と定められて投獄され、翻訳の中断を余儀なくされた。獄中から解放された後、ようやく未完の「源氏物語」漢訳に再び手をつ

けることができるようになった。一九五七年八月号の「訳文」に彼の「源氏物語（選訳）」が掲載されている。これについて一九五八年八月三〇日付の佐佐木信綱宛の書簡に言い及んだ。

当地「訳文」といふ月刊雑誌（誌）の八月号に萬葉訳之

有 選りだし源氏桐壺一帖をや、古き口語に訳して出し申し候 漸次貴国古典に興味を感じ初めたる様に見受けられ候 益々小生儀学力不足を痛感致し候

源氏についてハ池田氏大成 島津氏の講話及び谷崎氏の
新訳を参考に辿り読申居候

書簡によれば、錢稻孫は翻訳にあたり谷崎潤一郎の新訳を参照したという。「新訳」は一九五一年から一九五三年にかけて出版された「潤一郎新訳源氏物語」を指すであろう。同じく「源氏物語」の漢訳者である豊子愷は、「源氏物語」に関する参考書は、日本では数十種類にもほつている。私はその大部分を入手し目を通した。訳本のなかでは、谷崎潤一郎の訳がもっとも適切だと思う。分かりやすく古文に忠実で、作者紫式部本来の味わいを失っていない¹⁷と谷崎の訳を礼讃する。錢稻孫も豊子愷と同じような理由で谷崎の新訳を選んだと考えられる。谷

崎も錢稻孫が「源氏物語」の翻訳に取り組んでいることを知った。したがって、「源氏物語」を翻訳する意向を伝えた鮎麗明の書簡への返信には、谷崎は「源氏物語の漢訳は前に錢稻孫氏のものが出ています等と思いますが、それとは別に又新しい訳が出るのは喜ばしいことであり、挿絵を入れることも甚だ結構で大賛成であります¹⁸」と伝えた。

「訳文」に掲載された錢稻孫の「桐壺」が「非常に好評だった」ため、「人民文学出版社は、一九五九年二月、「源氏物語」の全巻の翻訳を錢稻孫と正式に取り決めた¹⁹」と、文潔若は「源氏物語」はいかに訳されたか²⁰で述べている。また、同文によれば、錢稻孫は一九五九年一〇月まで四万字の原稿を書いたが、月に四千字の速度が期待に達しないため、中断させられた。かわりに、北京編訳社の翻訳した「源氏物語」を校訂することになった。「当時、日本語翻訳者が多いとはいへ、古典文学名著翻訳の任に堪えるのは非常に少ない²¹」という状況があり、焦りだした出版社は錢稻孫の進捗が遅いと判断したのであろう。「源氏物語」の翻訳を止めさせられた後、錢稻孫は依頼された近松門左衛門と井原西鶴の作品翻訳に手がけた。一九六三年に全部で三六万四千字の原稿を出し、江戸文学に対する翻訳の空白を補った²²という。三年間で三六万字というペースは、「源氏物語」翻

訳当時の月に四千字のより倍ほど早かった。錢稻孫が「源氏物語」に対し丁寧な訳を施したことが推測される。

前述で触れたが、一九六二年から豊子愷が「源氏物語」を訳し始めた。文潔若は豊子愷訳「源氏物語」第一巻を錢稻孫のところに持って行ったところ、

その時、錢稻孫はすでに白内障を患い、字を読むことさえ難しい。私は「源氏物語」原文を一段落ずつ読んでから、豊子愷の訳文を読んだ。彼は完全に耳に頼りながら自分の意見を出した。このように、数十箇所²²の修正意見を言ってくれた。

錢稻孫は出版社の都合で「源氏物語」漢訳の中止を余儀なくさせられたが、その訂正ぶりからみれば「源氏物語」に対する情熱は冷めることなく、「源氏物語」への愛着が垣間見られる。その点では海の向こうにいる谷崎潤一郎と共通していると言えるよう。

「源氏物語」漢訳のことで谷崎に対する理解が深まったためであろうか、錢稻孫は谷崎自身の作品も訳そうと試みた。翻訳したのは「月と狂言師」である。「月と狂言師」は谷崎が一九四九

年一月号「中央公論」に発表した、「戦後の作品の、一番最初に発表したものである。」²³ 錢稻孫は翻訳のことを書簡で谷崎に報告した。書簡の写真はウェブに上がっておるが、画像が朦朧としているため、文面は読めない。筆者は実際それを目にしていないため、記述内容の正確さを確かめようはないが、提供者によれば内容は次のようである。

勝地是吾廬 看花里不逾
尋秋步履尺 坐對玉蟾蜍

最近々作月と狂言師を譯し、郊居をお喜びなさる一句を右の様に譯しました。お目に掛け申します。

一九五七年十二月

錢稻孫時年七十二 寫奉

谷崎先生教正²⁴

訳し上げた「月と狂言師」はいずれの雑誌にも投稿されないままであった。一九八一年に文潔若によつて「日本当代小説選(下)」(北京：外国文学出版社、一九八一年)に収録され、はじめて「月亮和狂言師」として日の目を見るようになった。そこ

で、上掲書簡にある詩句を「月亮和狂言師」に照らし合わせてみたところ、「尋秋步咫尺」のかわりに、「寻秋但咫尺」となっていることがわかる。

また、「月亮和狂言師」文末に訳者署名は「錢稻孫」ではなく、彼の次男にあたる「錢端義」となっている。三年の長きにわたる中国内戦の終結に伴って出獄した錢稻孫は、周作人のように出版社の要請によりペンネームの変更をさせられることはなかったが、完全に自由に本名での作品公表までは到底できなかったのである。

戦後においての錢稻孫の翻訳活動は、ほとんど出版社の依頼を受けて行う形になっている。そのうえ、古典文学の注文がほとんどであった。「月と狂言師」は明らかに従来の注文とは類が違い、錢稻孫が自ら選んだ作品と考えられる。谷崎は終戦の直後、阪神間の魚崎の家が空襲で焼夷弾の直撃を受けて、京都に移り、南禅寺下河原町で家を持ち始めた。その時の近所付き合いをもとに、「月と狂言師」を作った。「月と狂言師」に描かれた「私」と近所との睦まじい関係は、周りに敬遠された錢稻孫にとって憧れだったのであろう。

三、購書から始まった文遊―岩波茂雄と

岩波茂雄は一八八一年（明治一四年）に生まれ、一八八七年生まれの錢稻孫より少し年上だが、歴史をともした同時代人といえる。彼は一九一三年に岩波書店を開業し、翌年、夏目漱石の知遇を得て処女出版「こゝろ」を刊行し、出版界において足場を固めた。現在、岩波書店は、周知のとおり、すでに日本において屈指の大手出版社として発展してきた。日本の出版界に消せぬ足跡を残したことは、いうまでもない。

岩波茂雄は中国に対し好感を持ち日中戦争に反対だった。「多少世間的な斟酌もあったが、個人的な話になると遠慮も会釈もなく、「当時の軍部のやるのが、正義の反対である」ことを言ったりしたという²⁸。一九四六年「世界」の創刊に際し」で、彼は次のように述べた。

年来日華親善を志していた私は、大義名分なき満州事変にも支那事変にも、もとより絶対反対であった。また三国同盟の締結に際しても、太平洋戦争の勃発に際しても、心中憂憤を禁じ得なかつた。そのために自由主義者と呼ばれ、非戦論者とされ、時には国賊とまで誹謗され、自己の職域

をも奪はれんとした。それにも拘らず大勢に抗し得ざりしは、結局私に勇気がなかったためである。

さらに、阿部能成の記述によれば、「岩波は人に会う毎に、日支事変の暴挙を攻撃し、支那は昔からの日本の恩人であり恩師であるというのに、これを討つとは実に忘恩の振舞だといひ、この戦争には始から反対だったのである」といふ。彼の中国と敵対したくない心情が窺われる。戦前と同じように、岩波がしよつちゆう中国人を援助しつづけた。具体例を挙げると、日本に亡命し、千葉に住んでいた中国の文学者郭沫若が、一九三七年日中戦争が本格的に始まった後、妻子を残して日本を脱出して帰国した。岩波はその子どもの学資を卒業まで出した。また、長く上海で日中友好のために奔走する内山完造に向かつては、「内山君、僕の最後の切札は中国にあるのだから、君が決心してやる事なら、なんでもいうてくれ、僕は全面的に支持する、一つ二人でやらう」と語ったようである。

岩波と中国について述べてきたが、彼と錢稻孫との関係はどうだったのか。二人の接触は、錢稻孫の岩波書店への教科書注文に始まったのである。「岩波茂雄伝」に錢稻孫との交遊を岩波と中国人との個人的関係の典型とされている。次のように記さ

れている。

岩波と中国人との個人的関係をいへば、慶応義塾出身で、日支事変中北京大学文学部長になり、万葉の歌を翻訳したりした錢稻孫とも、以前より書物の注文を受けた関係から交を結び、大正五六年頃(?)には、北京図書館長になつた錢あてに書物を送つたりして居た。さういふわけから錢も来日の度毎に店を訪ひ、しまひには家庭的にも親しくなり、(後略)

錢稻孫の息子や娘たちはつぎつぎに日本に留学し、岩波の世話になり、岩波家に寄寓することになった。長男は岩波夫人の姪増田時子と結婚した。それによつて両家は親族関係になり一層親しくなつた。長年岩波書店に勤め、岩波茂雄の身辺にいる小林勇は、岩波が「大晦日には北京大学の文学部長錢稻孫氏一家及び雄一郎、雄二郎と一緒にすごした」と具体的な事柄を書き残している。しかし、なにより二家の関係を物語るのは、岩波書店所蔵の岩波茂雄あて錢氏一家の書簡である。そこに錢稻孫が直接岩波にあてた書簡二十二通、葉書三通が所蔵されており、そして息子や孫が送つたのは八通ある。封書が紛失したた

め、送付期日が確認できないものもある。確認されたものの中では、最も早く見られる二人のやり取りは一九二四年である。

書簡を通して見れば、いくつかの事柄がわかる。

まず、二〇年代の書簡においては主として図書注文に関する相談や問い合わせである。一九二四年一月十八日の書簡に「九月の変異にて御調べがつかないかも知れませんか 別に前記金額に送附致します 何卒別紙通り 新聞雑誌書籍にお送り下さい」とあり、「別紙」に

中央美術 一月号より十二月号まで

西田幾太郎 芸術と道徳

尚ほ各書店の出版目録御取寄せ下さいませんか 少々費用を負担しても宜しい

昨年購読の「思想」及び「中央美術」は三月までより来なくなつた 今年も特別な御心配なされ度く願ひます

と書いてある。つまり、錢稻孫は岩波書店発行の雑誌「思想」（一九二二年創刊）と中央美術社の「中央美術」（一九一五年創刊）を定期的に購入した。同年六月八日の書簡にも、岩波書店

に森口多里著「近代美術十二講」（東京堂書店、一九二二年九月初版）改訂版の取り寄せを頼み、「美術叢書」や、矢代幸雄著「西洋美術史講話」について問い合わせたことが記されている。購入した図書には美術関係が主要であることから、錢稻孫は美術に興味を示したことがわかる。事実、その時期に彼は民国政府教育部に勤めながら北京の大学で非常勤講師をしており、北京女子師範大学で美術を教えていた。美術に対する造詣が教育家の蔡元培に認められたため、その委嘱で北京大学の造形美術研究会を主宰し、週に一回美術展覧会を開いた。また、原著はドイツ語であるが、錢稻孫は日本語に基づき中国語訳を行った「造形美術」を一九二四年に出版させた。⁽³⁾ 岩波書店から購入した図書は、錢稻孫の美術教養の向上、「造形美術」の翻訳に寄与したであろう。ここでもう一つ注目すべきなのは、後日本文学の翻訳に携わるようになった錢稻孫は、その時点ではまださほど日本文学に関心を抱かなかつた、ということである。

小説をはじめとする日本文学関係の書物を注文し始めたのは、一九二七年頃からだと考えられる。その時に書簡から武者小路実篤「幸福者」や、森鷗外訳の「即興詩人」という類の本の注文が見受けられる。美術関係から文学関係への転換は、錢稻孫の転職に深く関わっている。父の死を機に、錢稻孫は一九二七

年に教育部での仕事を辞め、清華大学の講師として日本語を受け持つようになったのである。一九二七年十二月二十一日の書簡にこれに言及した。

今般不束ながら当大学の講師として日本語を受持ち候に就いては生徒に読ますべき良書の無之に困り入り候所 貴兄年来御刊行の文庫に武者小路実篤の「幸福者」有之と思付き候 試に読本に用い度く候 二十三冊ばかり取纏められ表記宛に郵送被下候間

つまり、錢稲孫は日本文学の関係書を心に留めるようになり注文し始めたのは、清華大学の日本語講師になった後である。そこから、日本文学に入り込んでいったのであろう。

三〇年代に、度重なる図書の購入より交遊を始めた二人は、信頼関係が更に深まった。錢稲孫は自分の子どもだけでなく、学生の世話を岩波茂雄に頼むようになった。例えば、一九三三年の書簡に、清華大学卒業生の喬冠華を東京大学の三木清に紹介するよう岩波茂雄への懇願が記されている。同様に、年度不明であるが、封筒に岩波茂雄の書留と思われる「陳錫明持参」という文字が残してある書簡に、

今般北京大学卒業の陳錫明君貴国に渡り自費留学致し候法律科を出たるものなればその方専攻いたさん由 帝大の研究院（大学院）にて教授方の指教を仰ぎ度志願に御座候目今語学未熟の間 東亞予備学校なにて補習可致 その上は何卒相当の教授へなりと御紹介願度候 茲に一言まづ御紹介申上御願申上候 長男仙台に参り候 永く御厄介になり この度々また非常なる御配慮に預り感謝かぎりなき次第に候 また改めて深謝可申候

とあり、北京大学卒業で日本留学をしようとする陳錫明のために岩波に教授の紹介を請った。学生の留学が叶うべく助けようとする錢稲孫にとって、中国人留学生の面倒を快く見て、出版界の人間としてそれなりの人脈を持つ岩波茂雄は願わしい相談相手であろう。

その後、日中戦争が始まった。それにもかかわらず、錢稲孫と岩波との文通は続いた。確認された戦中の書簡は四通ある。中には、岩波茂雄にはその時の心境や家庭事情を打ち明ける錢稲孫がいた。それゆえ、書簡は戦中の錢稲孫を知る手がかりとして重要な資料となる。これについて別稿で詳しく分析する。

戦後、錢稲孫が集めてきた図書は、「漢奸裁判」によってこと

ごとく没収された。出獄後、再び翻訳に取りかかるようになった際、岩波書店より必要な辞書類や年鑑などを送られてきたという。これは、翻訳で生計を立てる晩年の錢稲孫にとって有り難い援助でもあれば、精神的な大きな励ましともなったであろう。

ここまで述べてきたように、岩波も錢稲孫も日中間の友好を望み、それぞれ出版、翻訳という形で架け橋的な役割を果たそうとした。戦争期に二人の友好関係が絶えることなく保つことができたのは、家族間のつながりはもちろん一因であるが、上述した共通の思いも二人を引き寄せた要因となるであろう。

おわりに

本論は、錢稲孫と佐佐木信綱、山室三良、谷崎潤一郎、そして岩波茂雄との交遊を述べた。それらの交遊は、錢稲孫の翻訳活動をめぐって結ばれたものである。山室三良の要請で錢稲孫は日本詩歌を翻訳しはじめ、北京近代科学図書館の機関誌での掲載機会を得ることによって、技法を磨くことができた同時に、日本での名声も高くなった。それにつれ、佐佐木信綱との結びつきができ、とうとう協力し代表作「漢訳万葉集選」を世に出

した。また、「源氏物語」の漢訳は結果的には出版物に成らなかつたが、翻訳の時に現れた慎重さと執着は谷崎潤一郎との交流と関係していると考えられる。さらに岩波茂雄とはビジネスから始まった交遊とはいえ、積み重ねた往来によって深い間柄になった。岩波の図書や参考書の提供を通してのサポートは、間違いなく錢稲孫の翻訳活動を後押しした。特に、晩年の錢稲孫への援助は戦争を経たにもかかわらず、二人の友情が色あせていないことを物語っている。このように、さまざまな日本人との出会い、そして交遊があるからこそ、錢稲孫は能力を発揮する機会を得て、翻訳家として徐々に成長していったのである。

本論で引用した岩波茂雄宛錢稲孫の書簡はすべて岩波書店の所蔵である。その閲覧と複写にあたりお世話になった岩波書店 岩波茂雄書簡資料担当の方々に感謝の意を表する。

〔注〕

(1) 錢稻孫是中国20世纪杰出的日本文学翻译家。(查明建、謝天振著「中国20世紀外国文学翻译史(上卷)」、湖北教育出版社、二〇〇七年、七四五頁。)

(2) 鄭双双「錢稲孫訳一九五九年版『漢訳万葉集選』の成立

経緯—佐佐木信綱宛錢稻孫未発表書簡十二通、鈴木寅雄書簡

一通、「国文学」第九五号、関西大学国文学会、二〇一一年二月一〇日。

(3) 鄭双双「佐佐木信綱選、錢稻孫訳『漢訳万葉集選』研究—成立背景、出版事情、翻訳をめぐる」、『東アジア文化交渉研究』第4号、二〇一一年三月三十一日。

(4) 文潔若「編後記」、錢稻孫訳『万葉集精選』中国友誼出版公司、一九九二年、二七九頁。

(5) 訳名はそれぞれ「千曲川旅情之歌」「雲的去向」「北国農謡」となった。

(6) 梁启超说：「翻译本属至难之业，翻译诗歌，尤属难中之难。」（連燕堂著『二十世紀中国翻譯文学史—近代卷』、百花文芸出版社、二〇〇九年、五四頁）

(7) 『河南大学学报』での掲載受理済み、発行未定。

(8) 山室三良「跋」、錢稻孫訳『日本詩歌選』、北京近代科学図書館、一九四一年。

(9) 奥野信太郎「周作人と錢稻孫」、同『隨筆北京』、東京：第一書房、一九四〇年、六六頁。

(10) 西原大輔「谷崎潤一郎とオリエンタリズム—大正日本の中国幻想—大正日本の中国幻想」（中央公論新社、二〇〇三

年）を参照。

(11) 櫻木富雄「日本文学報国会—大東亞戦争下の文学者たち」、青木書店、一九九五年、二二五頁。

(12) 日本文学報国会編『文芸年鑑 二六〇三年版』桃蹊書房、一九四三年、三五頁。

(13) 前掲櫻木富雄「日本文学報国会—大東亞戦争下の文学者たち」二一七頁。

(14) 文潔若「我所知道的錢稻孫」、陳遵編『斯人不在』、桂林：広西師範大学出版社、二〇〇六年、二二一頁。

(15) 奥野信太郎「燕京食譜」、同『隨筆北京』、東京：第一書房、一九四〇年三月、四一—四二頁。

(16) 豊子愷（一八九八—一九七五）、浙江省出身で中国現代画家、漫画家、翻訳家。

(17) 关于『源氏物語』の参考书，在日本不下数十种之多，大部分我已经办到，并且读过。在译本中，我认为谷崎潤一郎最为精当：既易于理解，又忠于古文，不失作者紫式部原有的风格。（豊子愷「我訳『源氏物語』」、同『緑縁堂隨筆集』、浙江文芸出版社、一九八三年五月第一版、四四〇頁）

(18) 「谷崎潤一郎全集第二十六卷」中央公論社、一九八六年六月二〇日再版発行、一一一頁。

(19) 文潔若「源氏物語」はいかに訳されたか、「人民中国」、二〇〇六年六月号、四八頁。

(20) 当時の情况は、日文译者虽然很多、但是能胜任古典文学名著的译者、却是凤毛麟角。(前掲文潔若「我所知道的錢稻孫」、二〇七頁)

(21) 前掲文潔若「源氏物語」はいかに訳されたか、四八—四九頁。

(22) 那时钱稻孙已患了白内障、看字吃力了。我便念一段《源氏物語》原著、再读丰子恺那段中译文。钱稻孙完全靠听觉来提出自己的看法。就这样、终于整理出几十条修改意见。(前掲文潔若「我所知道的錢稻孫」、二二—二一頁)

(23) 谷崎潤一郎「月と狂言師」のこと、「谷崎潤一郎全集第二十三卷」、中央公論社、一九六九年三月二五日、三二—六頁。

(24) <http://www.tianya.cn/publicforum/content/books/1/85029.shtml>

(25) 前掲文潔若「我所知道的錢稻孫」、二二—二五頁。

(26) 安倍能成「岩波茂雄伝」、岩波書店、一九五七年、三六〇頁。

(27) 小林勇「惜櫟莊主人——一つの岩波茂雄伝」、岩波書店、一九六三年、三五四頁。

(28) 前掲安倍能成「岩波茂雄伝」、三六〇頁。

(29) 前掲小林勇「惜櫟莊主人——一つの岩波茂雄伝」、二二—二三頁。

(30) 前掲安倍能成「岩波茂雄伝」、三六一頁。

(31) 前掲安倍能成「岩波茂雄伝」、三六四頁。

(32) 邱巍「吳興錢家…近代學術文化家族的断裂与传承」、杭州：浙江大学出版社、二〇〇九年、二〇四頁。

(33) 「造形美術」が一九二四年に北京…商務印書館によって出版されてから六年後、その影印本「万有文庫第一集—千種造形美術」は一九三〇年に同出版社から出た。また、二〇〇七年に北京中献拓方科技有限公司もそれを版行した。

(すう そうそう／本学大学院生)